

泉鏡花の芥川龍之介の葬儀に於ける「弔辞」の実原稿による正規表
現版

又は

——「鏡花全集」で知られたこの弔辞「芥川龍之介氏を弔ふ」は実
際に読まれた原稿とは甚だしく異なるという驚愕の事実——

「やぶちゃん注：泉鏡花の芥川龍之介の葬儀で本人によって読まれた自死の三日後、谷中齋場にて昭和二（一九二七）年七月二十七日午後三時から行われた葬儀で、先輩総代として第一番に本人によって読まれた弔辞である。以下に示したものは、その自筆原稿で、一九九二年河出書房新社刊の鷲唯雄編著になる「年表作家読本 芥川龍之介」に載った画像で、それを元に電子化した。ワード文書への画像取り入れが上手く出来ないので、[ブログで示した画像のリンク](#)を挿入しておく。なお、パブリック・ドメインの著作物を平面的にそのまま写した画像には著作権は発生しないというのが、文化庁の見解である。岩波の「鏡花全集」巻二十八（一九四二年刊）と校合したが、驚くべきことに、句読点以外（現行より遙かに多く打たれてあり、句点と読点の相違も数多ある）では、現行、知られているそれとは、異様に激しい異同があることが判明した。以下に示す。★は重大な異同と私が思うものにした。

*

- ①原稿標題はあくまで「弔辞」であるのに、現行は「芥川龍之介氏を弔ふ」となっている。
- ★②原稿冒頭「玲瓏明哲」が現行では「玲瓏、明透」と書き換えられている。
- ③原稿の「其の文」が、現行では「その文」と「其」がひらがなになっている。
- ★④原稿「名玉、文界に輝ける君よ。」が、現行では「名玉山海を照せる君よ。」と激しく異なっている。
- ⑤現行のものは最後の一文のみを改行してあるが、原稿では全部で三段落が形成されており、行頭の字空けほどの段落にも存在しない。
- ★⑥原稿の「巨星天に在り」の前に、現行では「倏忽にして」とある。
- ⑦同前の箇所「在り」は、ひらがなで「あり」となっている。
- ★⑧原稿では「異彩を」とある部分が、現行では「光を」となっている。
- ★⑨原稿の「密林」が「翰林」となっている。
- ★⑩原稿の「敷きて」が「曳きて」となっている。
- ⑪原稿の「とこしなへ」が「永久」と漢字になっている。
- ⑫原稿の「手を取りて」が「手をとりて」となっている。

⑬原稿の次の「其の容を」が「その容」と「其」がひらがなになっている。

⑭同前で次の「其の聲を」が「その聲」となっている。

★⑮原稿の「秋悲しく」が「秋深く」となっている。

⑯原稿の「其の面影」が「面影（おもかげ）」だけで「其の」を外してある。

⑰原稿の「代うべくは」が「代ゆべくは」となっている。

⑱原稿の「いふものぞ」が「言ふものぞ」と漢字になっている。

★⑲原稿の「令郎」が「遺兒」と書き換えられている。

⑳最後の一文終辞「辭」（ことば）「つたなきを羞ぢつと、謹で微衷をのぶ。」は段落を成していない。

★㉑岩波「鏡花全集」では編者によるクレジットは『昭和二年八月』となっている。

*

その⑳から、後に本「弔辞」が雑誌に収録されるに際して、鏡花自身が書き換えたものであると推察出来る。しかし、弔辞とは作品ではない。あくまで一回性のものである。書き換えられる謂われは、明らかな誤字以外はあつてはならないものと私は考える。恐らく多くの芥川龍之介及び泉鏡花の愛読者は、書き換えられた弔辞が芥川龍之介の葬儀の場で読まれたと思っ**て**いるはずだ。これはどうしても言っておかねばならぬと感じた。なお、弔辞原本には当然の如くルビは全くない。以下でも、それに従った。

また、参考までに「鏡花全集」巻二十八所収の「芥川龍之介氏を弔ふ」を後に添えた。」

弔辞

玲瓏明哲、其の文、その質、名玉、文界を輝ける君よ。溽暑蒸濁の夏を背きて、冷々然として獨り涼しく逝きたまひぬ。

巨星、天にあり、異彩を密林に敷きて、とこしなへに消えず。然りとは雖も、生前手をとりにて親しかりし時だに、其の容を見みるに飽かず、其の聲を聞くをたらずとせし、われら、君なき今を奈何せむ。おもひ、秋悲しく、露は涙の如し。月を見て其の面影に代うべくは、誰かまた哀別離苦をいふものぞ。

高き靈よ、須臾の間も還れ。地に、君にあこがるゝもの、愛らしく賢き令郎たちと、温優貞淑なる令夫人とのみにあらざるなり。辭つたなきを羞ぢつゝ、謹で微衷をのぶ。

昭和二年七月二十七日

泉鏡太郎

●参考（「鏡花全集」巻二十八所収の「弔詞」パートの「芥川龍之介氏を弔ふ」。編者によるクレジットが昭和二（一九二七）年八月として標題下方にある。ルビにある踊り字「く」は正字化した）

あくたがほりうのすけし とむら
芥川龍之介氏を弔ふ

玲瓏、明透、その文、その質、名玉山海を照らせる君よ。溽暑蒸濁の夏を背きて、
冷々然として獨り涼しく逝きたまひぬ。倏忽にして巨星天に在り。光を翰林に曳きて
永久に消えず。然りとは雖も、生前手を取りて親しかりし時だに、その容を見るに飽か
ず、その聲を聞くをたらずとせし、われら、君なき今を奈何せむ。おもひ秋深く、露は涙
の如し。月を見て、面影に代ゆべくは、誰かまた哀別離苦を言ふものぞ。高き靈よ、須臾
の間も還れ、地に。君にあこがるゝもの、愛らしく賢き遺兒たちと、温優貞淑なる
令夫人とのみにあらざるなり。

ことば
辭つたなきを羞ぢつゝ、謹で微衷をのぶ。